



私はハッと我に返って宿題を思い出し、焦り始めた。

八月終盤、夜、二階の部屋の窓を開け、傍らに蚊取り線香を置いて宿題をしていると、遠くで「きゅきゅきゅのきゅ、きゅきゅきゅのきゅ」と、「オバQ音頭」が聞こえ、時おり、そよりと涼しい風が頬を撫でる。庭先でリーリーと鳴く虫の声に気づく。すると、胸のあたりが、しーんと寂しくなるのだった……。私は祭りの終わりのせつなさを、「オバQ音頭」で初めて知った気がする。

そんな夏の終わり、
「どう、宿題進んでる？」

小学生の頃、四十日間の夏休みは果てしない時間に思えた。

「ちゃんと計画を立てて宿題をしなさい」
親も先生も、事あるごとに言っただけだ。私は野に放たれた馬と同じだった。おばあちゃんの家遊びに行く。海水浴、スイカ割り、トンボ採り、打ち上げ花火、肝試し、かき氷、アイスキャンデー。毎日がお祭りだった。

けれど、果てしなく思えた楽しい日々にもやはり終わりはある。八月半ば、公園に盆踊りの櫓が組まれ、「オバQ音頭」や「炭坑節」が繰り返し流れ始めると、

Taste
of
the Season vol.5

text by Noriko Morishita
illustration by Mizue Hirano

梨と「オバQ」

エッセイスト 森下典子

と言いながら階段を上がってくる母が、よく机の端に置いて行ってくれたのが、皿に盛った梨だった。金色の実の皮をきれいに剥き、それを八つに割り、酸っぱい芯の部分は包丁でV字に切り取ってあった。白い果肉がみずみずしく清らかに見え、甘い滴りが皿に溜まっていた。一切れ口に入れた。

シヨリシヨリシヨリシヨリ……
涼やかな歯触りが頭の中に冴え冴えと響き渡った。口いっぱい溢れだす甘い水の香りが、子供心にぼっかり空いた夏の終わりの寂しさを優しくなだめてくれた。

むさぼるように、次から次へと梨を頬張った。シヨリシヨリという心地よい歯触りが、
(楽しい夏休みは終わってしまうけれど、またいい季節がやってくる)
と、心を前向きにしてくれた。皿の上は、またたくまに、水たまりだけになった。

梨には何度も救われた。中学時代、風邪をひいて寝込んだ時も、母が梨を剥いてくれた。ナイフでスルスルと皮を剥く

と、金色のリボンがくるくるとほどけて、白い果肉が現れる。その実は、母の手の温度で、少しぬくもっていたが、口に入れると、甘い汁がたっぷり溢れだし、唾をのむのも辛かった喉の痛みが嘘のように和らいだ。

夜中に、台所の流しに立ったまま、梨にかぶりついたのは、失恋した三十歳の時だった。包丁で皮をスルスル剥くと、涙のような滴がだらだらと手首を伝った。肘の先まで濡れるのも構わず、丸のまま齧った。甘い甘い梨だった。一つでは満たされず、立て続けに二つ平らげ、一人で生きて行こうと思った。

心が乾いた時、私は今も梨を食べる。シヨリシヨリと白い実を齧ると、耳の奥で「オバQ音頭」が鳴っているような気がする。



もりした のりこ／神奈川県生まれ。横浜市在住。日本女子大学文学部国文学科卒。『週刊朝日』の名物コラム「デキゴトロジー」のライターを経て、エッセイストとなる。主な作品に、『日は好日』『猫といっしょにだけで』（新潮文庫）、『いとしいべもの』（文春文庫）など。